

投稿

星座の神話とどう向き合うか

～現存最古の星座図鑑『カタステリスモイ』～

小島 敦（名古屋大学人文学研究科）

1. はじめに

本記事は、2022 年 6 月 20 日に行われた Zoom 談話会『星座の神話とどう向き合うか』にて筆者が講演した内容を書き起こしたものである。

星座に触れる上で、もはや切り離すことができなくなっている星座の神話には、どのような資料が存在するのか。また、そのような星座の神話とどのように向き合うことができるだろうか。この講演では、実際に我々に伝わっているギリシア文献を参考とすることで、そのヒントを求めた。

2. 講演内容

まず講演内では、「星座の神話」を「星座の同定のためにギリシア神話の登場人物を用いる話」と定義した。その上で、星座の神話と関わる 3 つの疑問（①いつ登場した？②原典はあるのか？③なぜ語ったのか？）を設定した。その疑問に答える形で、星座と星座神話の歴史の概略や、解説の助けとなりえる文献を紹介、そして星座の神話との向き合い方を考えた。

本記事も講演と同じ順番で議論を展開する。まずは前提知識としてギリシアにおける星座の歴史を、その数に着目して概観したい。

2.1 ギリシアでの星座の歴史

(1) 紀元前 8-5 世紀

星座は古くからギリシア文献に登場する。例えば、ギリシア文献最古の作品として知られるホメロスの『イーリアス』および『オデュッセイア』では、盾の模様（Hom.II. 18.483-489）や航海上の目印（Hom.Od.

5.272-275）として現れる。しかしながら、これらの文献に登場する星座は 5 つ前後と非常に限られた数のみである。

しかし、その後時代が下ると、かつては言及されなかった星座も見られるようになり、その数は時代と共に増えていくと考えられる。例えば、エウリーピデースの『レースス』では、ホメロスも言及したヒュアデスと併せて、わし座が登場する（Eur. Rhes. 531）。

(2) 紀元前 4 世紀以降

一方、前 4 世紀からはギリシアにおける星座の状況はそれまでと大きく変わっていく。というのも、この頃に 40 以上の星座を体系的に扱う文献（エウドクソス『パイノメナ』；断片のみが現存）が登場しており、遅くともこれ以降、ギリシアでの星座は 40 以上という数で安定するようになるからだ。その後、僅かな変動を経て、後 2 世紀のプトレマイオスの 48 星座へと繋がっていく。

前 4 世紀に星座の数が増えた背景には、メソポタミアやエジプトの影響が十分に認められる。特に、黄道十二星座はメソポタミアから多大な影響を受けている[1]。

しかしながら、エウドクソスの『パイノメナ』以前に、ギリシアでいくつ程度星座が語られていたのか、また、エウドクソス前後でその数が急激に変化したのか、それとも段階的に増えていったのか、その正確な経緯は未だ不明な部分が多い。

2.2 ギリシアで星座の神話を残す著者

僅かながらも星座が古くから文献に登場しているのを見てきた。一方で、星座の神話

はどのような人が語ってきたのだろうか。

(1) 紀元前 8～5 世紀

ギリシアにおいて初めて星座の神話を残した人物は前 8 世紀末に活躍したとされるヘーシオドスである。彼の名で伝わる断片作品『アストロノミアー』もしくは『アストロロギアー』では、ヒュアデスとニンフたちが同一視される (断片 227a Most[2])。

その他に星座と神話を結び付けた人物は、前 5 世紀に活躍したアテナイのペレキュデスという神話学者や悲劇作家のエウリーピデース (前 480 頃～前 406 頃) が挙げられる。

確かに、前 8 世紀頃 (ヘーシオドス) から確認できる星座の神話であるが、前 5 世紀までで星座の神話を残した著者は上で述べた 3 人しか知られておらず、また語られる例も僅かな数である。前 5 世紀までのギリシアでは、星座の神話はあまり語られないものだったといえるだろう。

(2) 紀元前 4 世紀以降

前 4 世紀を過ぎ、星座の数が 40 以上で安定するようになると、星座の神話を取り巻く状況も変化する。カリマコスがかみのけ座に関わる物語を作っていたり、アッポローニオスが『アルゴナウティカ』の中で先の展開を窺わせる際にかんむり座の物語を用いている (Apollo.Rhod. Argon. 3. 1000-1005) など、星座の神話がある程度広まっていた形跡が見られるようになる。

その後はヘレニズム後期やローマの作家を通して、星座の神話はより拡大していった[3]。

そのような流れの中、ギリシアにおいて特に星座や星座の神話に強い影響を残したのが、今回扱うアラートス (前 310 頃-前 240 頃) とエラステネース (前 276 頃-前 194 頃) の 2 人の人物である。

2.3 アラートス『パイノメナ』

まずはアラートスから見ていきたい。彼の著作で唯一現存している文献が、『パイノメナ (見られうるものたち)』である。1154 行からなるこの作品は、天文や天気に関する当時の科学書 (その 1 つが前述のエウドクソスの『パイノメナ』である) の内容を詩の形に変換しており、星座がいつ出て、いつ沈むのかという暦に関する知識や天気の前兆となりそのような知識などを一般の人にも親しみやすく伝えた文献である[4]。

親しみやすく星座等の知識を伝えたという点、星座の神話がふんだんに使われているような印象を受けるが、実際はそうではなく、寧ろ神話と結び付けられずに紹介されるものの方が多い。また、神話が紹介される場合でも、その説明は豊かなものとはいえず、例えばかんむり座について語られる部分では

そこにはあの冠も、ディオニュソスが逝けるアリアドネの形見にと定め置いた輝かしい冠は、苦勞に打ちひしがれた人物の下方を回転している。(v.71-73) [5]

となっている。このように、少なければ 1 語、長くても 4 行程度と、神話的な説明は著作全体を通して抑制的だといえる (ただし、例外的におとめ座の神話には約 40 行が費やされている)。それゆえに、この作品を恒常的に星座の神話の出典として用いるのは難しいかもしれない。

しかしながら、この作品は作られた当時から我々の時代まで、時代を超えて様々な人に愛され、読み継がれてきた著作であり、その影響力は計り知れない。また、星座の体系的な記述として歴史上に占める地位も大きい。神話の分量は確かに抑制的であるものの、その中にはさそり座に追われるオリオン座の話 (v.637-646) など、我々にも非常に親しみの

深いものが紹介されており、目を通して見る価値は十分にあるだろう。

2.4 エラステネース『カステリスモイ』

エラステネースに帰される星座の文献は『カステリスモイ』という。この文献は、前3世紀頃にアレクサンドリアという都市で作られたとされており、星座の神話と図像学的な説明が記されている。なお、かつての学説から著者は偽エラステネースとして紹介されることもあるが、現在の研究ではこの文献の大元はエラステネースに遡るとする説が主流であり、偽とされることは極めて珍しい[6]。

星座の神話については、多くの場合で、伝統的な神話を典拠と共に紹介した後、その内容をふまえて星座へと繋げている。例えば、かに座の章(第11章)では次のように語られている[7]。

これはヘーラーによって星座たちの中に置かれたと思われる。というのも、ヘーラクレースが海蛇を殺した時、他のものたちもヘーラクレースに対して共に戦っていたのだが、蟹は湖から飛び出て彼の足を挟んだ。そのようにパニユアシスは『ヘーラクレース』の中で述べている。激昂したヘーラクレースは足を用いて蟹を粉砕したようである。そのような理由で大きな栄誉を得て、12の黄道星座に数えられている。[...]

このような方法で、『カステリスモイ』では40以上の星座の神話を確立している。

星座の神話と星座の図像学的説明という2つの内容は、アラトスの『パイノメナ』の中でも一部の星座についてだが登場している。だが、『カステリスモイ』はその2つの情報が文献中の全星座で紹介されているという

点で、アラトスとは大きく異なる。この一定の情報が網羅的に記載されている点により、『カステリスモイ』は汎用性の高い星座神話の原典と位置付けることができるだろう。

2.5 エラステネースはどのような人か

『カステリスモイ』の著者、エラステネースについても少し触れておきたい。

彼の名は今日でもよく知られており、有名な業績も多い。代表的なものとしては、地球の円周を計算したことや、図書館長やプトレマイオス4世の師匠を務めたことである。そんなエラステネースの活躍した分野は幅広く、地理学や天文学をはじめ、詩・文学・歴史学など多岐に亘っている[8]。彼の生きたヘレニズム期には学問研究が栄えており、そのようなころに幅広い分野において活躍した彼は、まさに時代を代表する学者であったといえるだろう。

「学者」というと、現代の我々には学問を研究していて、学術的な考えができる人という印象がある。しかし反対に、「神話」というと、存在しない、ありえないこととして捉えられがちである。そんな神話を学者が語ったという、どこか矛盾のようなものを感じるかもしれない。その一方で、現代の我々が星空の解説を行う際、星空そのものは自然の存在で、天文学という科学と結びついているにもかかわらず、星座の神話に言及することがある。このことは、星座神話の文献を書くというエラステネースの活動と、どこか通じる部分があるのではないだろうか。

ここからは、『カステリスモイ』がどのような方法によって書かれているのか、どのように星座の神話が『カステリスモイ』において位置付けられているのかを考えることで、普段我々が星座の神話を紹介する際のヒントを探してみたい。

2.6 学者、神話を語る

先述の通り、『カステリスモイ』では伝統的な神話を出典と共に紹介することがある。その回数は非常に多く、『カステリスモイ』全体で、22人の著者、のべ43回も言及しており、それを根拠にして伝統的なギリシア神話を語っている。この行為は、先行する文献を調べ、必要な箇所でその内容を出典と共に引用するという現代の研究上でも欠かせない学術の要素と考えられるだろう。すなわち、この文献内では、そのような学術的手順をふんだんで星座と神話を結び付けているのである[9]。

このように紹介すると、『カステリスモイ』は確かに引用という学術的な手順を用いて作られているが、その内容は多くの文献から神話を集成しただけの引用集だと捉えられるかもしれない。しかしながら、『カステリスモイ』の内容は単にそれだけにはとどまらない。

その例として、第18章の内容を紹介しよう。この章にはうま座（現在のペガサス座に相当する）に関する記述がある。

アラトスはヘリコーン山に蹄を以って泉を作った馬であるという。[...]しかし、ある者たちには翼を持っていないことの故にその説明をすることは信じられないと思われる。エウリーピデースは『メラニッペー』の中でケイローンの娘の牝馬であると言っている[...]

第18章の冒頭では、アラトスなどがこの星座をペーガソスと述べていることが紹介される。まさにこの部分は、先行する文献を調べて、その内容を持ってきている部分である。仮に、『カステリスモイ』が単なる引用集であるならば、アラトスらの記述をふまえてこの後にペーガソスの説明

が続いただろう。しかし、この後にはそのような記述はなく、寧ろ「翼を持っていないこと」を根拠とし、「その説明をすることは信じられない」と綴った上で、その後馬の星座に別の神話（メラニッペー）を当てはめようとしている。つまり、先行文献を鵜呑みにしてそのまま記述するのではなく、それをふまえた上で、その内容が実際の星座の姿を説明するに相応しいか否かまでもを考えて書かれているといえる。星座という対象を相応しいと思える形で理解しようとするエラステネースの試みが読み取れるのではないだろうか。

まさに、この行為は単なる引用ではなく、説明と呼ぶに相応しい行為であろう。つまり、『カステリスモイ』の中では、上記のような手法を用いることで、「星座」という世界を構成する要素を「神話」という引き継がれたものを用いて説明をしている。このような行為は「手元にある情報を基に改良等を加え、世界の要素を解き明かす」という研究の要素を有しており、この点では、地球の円周を計測することも、神話を用いて星座の存在に理由を与えることも似た方向を向いているといえるだろう。

したがって、星座の神話を語ることは、学術的な側面を有することもあったといえる。

2.7 星座の神話とどう向き合うか

ここまでエラステネースの事例を注視してきたが、我々が活かせるものはあるだろうか。

筆者が特に強調したいことは、「星座の神話は決してお伽話を適当に付けたものではない」ということである。確かにギリシア神話は現実離れた話や現代の価値観とは合わない話も多く、やはり科学とは遠い存在のように思われる。しかしながら、今回見てきたよ

うに、星座の神話を語るために、出典を示し批判的検討を行った人物がいたことも事実である。ここには現代の学問としても大切なことが含まれているのではないだろうか。

また、現実離れしたと思える点や我々の価値観と合わない点、そうした部分に直面した時こそ、古典文献に触れて欲しい。話の要素にはもちろん物語を盛り上げるためとしての部分もあるが、それだけでなく、当時の社会や思想、あるいは個人的な背景が関係している。「おかしい」や「理解できない」だけで立ち止まるよりも、もう少し踏み込んで触れてみる方が、自身が受け取れることも相手に伝えられることも増えるのではないだろうか。

だからこそ、実際の解説では使わないかもしれないが、物語や文献の背景を知っておくことは損にはならないだろう。そういうことを教えてくれるものこそが、今日まで残されてきた古典文献である。古典作品を読むことは、古代ギリシア人らが実際に語った神話のバージョン以外にも様々なことを教えてくれるのだ。

3. 星座の神話として何を話すか

さて、星座神話の解説の助けとなりえそうな文献『カステリスモイ』を紹介してきたが、我々はこれを読んで、どのようにして星座の神話を扱えばいいのだろうか。というのも、古典作品には我々の知っている話と同じものも書かれているが、その一方で一致しないものも書かれていることもある。我々はギリシア文献に書かれていない話を“誤ったもの”として訂正するべきなのだろうか。当日や事前に募集した質問では、このような質問が出た。もしかすると、同じような疑問を持つ読者も多いかもしれない。本章では、あくまで1つの選択肢、指針の1つとしてではあるが、この問いの答えとして、筆者の意見を述べておきたい。

結論から述べると、星座解説において話される星座の物語は、ギリシア語文献に書かれているもの“だけ”を語るべきだとは思わない。というのも、文献として古代ギリシアの人々が書いたものが伝えられてきている一方で、様々な人を通して伝えられるうちにいろいろな異説や解釈が生まれたことも事実だからだ。したがって、文献に載っている話とない話のどちらが良いのか・悪いのかと考えることは難しい。加えて、星空解説は解説者の主観が入る点が魅力の1つだと筆者は考えている。それぞれの解説者に合った（もしくは解説者が好きな）話が語られていいだろう。

確かに、ギリシア神話は異説が非常に多く、後の時代での改変も多い、変化に富んだものである。また、ギリシア神話には現代の倫理観から離れた箇所もあり、多くの人に触れる以上は変更を迫られる部分もある。そして、解説で様々なバージョンが語られることも必要であろう。しかしながら、これらのことは原典に触れないことの理由にはならない。寧ろ、様々な話があるからこそ、元の話はどういうもので、どの時点から変わり、我々がどういうバージョンによく親しんでいるのかを知ることは大切ではないだろうか[10]。

4. 書籍の紹介

今回紹介した文献を利用するために、翻訳作品を紹介しておきたい。なお、全てを挙げきることは難しいため、日本語文献と英語文献のうちいくつか絞って紹介する。

4.1 アラトス『パイノメナ』

・伊藤照夫訳（2007）『ギリシア教訓叙事詩集』京都大学学術出版会

・Kidd, D. *Aratus Phaenomena*, Cambridge University Press, 1997.

・Aaron Pochigian, *Aratus Phaenomena; translated, with an introduction and notes*,

Johns Hopkins University Press, 2010.

4.2 エラトステネース『カタステリスモイ』

・Robin Hard, *Eratosthenes and Hyginus Constellation Myths: With Aratus's Phaenomena*, Oxford, 2015

・Theony Condos, *Star Myths of the Greeks and Romans*, Phanes Press, 1997

上記文献はエラトステネースの『カタステリスモイ』に加えて、ヒュギーヌス『アストロノミア』の翻訳も収録されている。また、Hard, 2015 には『パイノメナ』やゲミノスの英訳も載っている。しかし、『カタステリスモイ』が完訳ではなく、神話部分のみの訳であることには注意したい。

5. おわりに

今回の談話会では、廣瀬匠氏、小林道生氏、松岡義一氏に、多大なお力添えをいただいた。お三方には、企画や事前の打ち合わせだけでなく、当日使用したスライドへのアドバイスや監修、さらには当日の進行等まで、細部までお気遣いいただき、様々なご支援をいただいた。

もし、今回の会が成功を収めているならば、お三方のご助力に他ならない。改めて、感謝の意を表したい。

文 献

- [1] Rogers, J. H. (1998) 'Origins of the ancient constellations: I. The Mesopotamian traditions', *Journal of the British Astronomical Association*, 108, 1, 1998a, ps. 9-28.
- [2] Most, G. M. (2007) *Hesiod, The Shield, Catalogue of Women, Other Fragments*, The Loeb Classical Library, London.
- [3] ローマでの星座の神話を残す文献として、ヒュギーヌスに帰される『アストロノミア』

やマーニーリウスの『アストロノミカ』などが挙げられる。

- [4] 伊藤照夫訳 (2007) 『ギリシア教訓叙事詩集』, 京都大学学術出版会: 490-491.; Stamatina Mastorakou, 'Aratus' Phaenomena beyond Its Sources', in *Aestimatio: Sources and Studies in the History of Science*, Vol.1(2020), pp.55-70.
- [5] 伊藤, 2007: 10 より引用。
- [6] cf. Pàmias, J. & Zucker A. (2013) *Ératosthène de Cyrène, Catastérismes*, Collection Budé-Les Belles Lettres, Paris : XX-XXIV など。
- [7] 本記事で用いる『カタステリスモイ』の邦訳は全て Pàmias & Zucker (2013) を底本にして、筆者が邦訳したものである。
- [8] Geus, K. (2002) *Eratosthenes von Kyrene*, Studien zur hellenistischen Kultur- und Wissenschaftsgeschichte, Munich.
- [9] Pàmias, J. (2014) 'Les Catastérismes d'Eratosthène. Choix mythographiques et production du savoir', in *Revue des Études Grecques*, 127, ps. 195-206.
- [10] 今回紹介した『カタステリスモイ』にもオリジナリティが認められる部分がある。『カタステリスモイ』が示してくれるように、出典に頼ることとその場に合わせた変化を付けることの両立は我々にも可能なはずだと考える。



小島 敦